

教養教育の「日本事情：多文化交流ディスカッション」授業研究

三浦 香苗

要 旨

「日本事情II」は、金沢大学教養教育の科目である。留学生（学部留学生と短期留学生）15名程度と日本人学部学生（1年生を主体とする）25名程度の共学クラスであり、小グループに分かれてディスカッションを行う。

本稿では、1997年から2002年度までの授業の問題点と改善について報告し、2001年度末に行った学生による授業評価アンケートの回答を分析して、授業の点検評価を行った。

アンケートは、t検定、相関係数、重回帰分析などの手法で分析し、次のような結果を得た。授業の評価点（＝満足度）の平均点は、100点満点中86点で、満足度に大きな影響を与えた変数は、授業の内容の面白さと、教師による説明のわかりやすさであった。学生自身の勉強量や授業への態度は、満足度とは関係がなかった。また、自分の目標を達成したかどうか、宿題のレポートの回数、留学生との活動に参加したいかどうかも、満足度との関連はみられなかった。授業に対する印象は、「楽しい」「面白い」を選んだ学生が多かった。しかし、「勉強になる」「視野が広がった」「考えるきっかけになった」といった真面目志向の回答を合計すると、「楽しい」「面白い」より多くなった。

このことから、学生の方向性はかなり真面目なものであり、しかも楽しく出席し、授業にかなり満足しており、満足の根拠は、自分の勉強量や態度などではなく、主として授業の内容の面白さと教師の説明のわかりやすさにあるということがわかった。

【キーワード】 日本事情，異文化，多文化交流，ディスカッション，留学生と日本人学生の共学

I. はじめに

教育に携わる者は、日々の授業を常に反省して問題点を認知し、その解決に向けての実践を積み上げ、それを検証しなければならない。

筆者は、金沢大学教養教育の一部として1997年より現在に到るまで、日本人学生に

も門戸を開放したディスカッション形式の「日本事情Ⅱ」の授業方法に年々改良を加え、2001年度には一定の成果が得られる授業の型がほぼ出来上がった。ここに、何をどのように行ったか、問題点をどのように改善したかを報告し、学生による授業評価を分析して、授業への満足度と、満足度に最も大きな影響を与えた変数を求め、考察する。

II. 本研究の位置づけ

文部省から四年生大学学長に向けて、「日本事情」を外国人学生に教えるようにという通達があったのが、昭和37（1962）年である。ところが、「日本事情」という科目で何を教えればよいかわからないので、日本の歴史、あるいは「わび・さび・タテ社会・恥の文化」などを教えておこうという状態が続いたようである¹。

そして、日本語教育学会誌『日本語教育』に「日本事情」が特集として初めてとりあげられたのは、1988年のことである²。そこでは、「留学生と日本人学生がほぼ同数の合同講義の形をとる例もある」（奥田久子1988）ことも報告されているが、ほとんどの場合、対象者は外国人学習者だったようである。

近年、キャンパスの国際化がごく普通の目標となり、留学生のみならず、日本人学生の異文化適応のための教育を考えなければならなくなった。留学生と日本人学生の合同授業が、それほど多くはないが、各地の大学で行われるようになり、異文化適応、多文化理解としての「日本事情」授業、ボランティア学生との共同活動、合同合宿³などが種々の形式で展開され、報告されている。多国籍の留学生と日本人の「日本事情」授業は、教師による一方的な講義ではなく、学生によるディスカッション、ディベート、ホームページやビデオ作成、研究発表といったプロジェクトワークが行われている。

本研究は、筆者の行ったディスカッション授業について検証し、不完全ながらも、多文化交流「日本事情」の一つの型を示すものである。

1 水谷修氏が『日本語教育と日本事情』（細川英雄1999）の談話中に、はじめて「日本事情」という言葉にぶつかったのは、昭和35（1960）年だと述べている。

2 『日本語教育』65号

3 日本人との合同合宿は、金沢大学留学生センターの日本語・日本文化研修プログラム（パリハワダナ助教が担当）でも行われている。

Ⅲ. ディスカッション授業がもつ問題点の予見と対応

多国籍の留学生と日本人学生のディスカッション授業を行うにあたり、前もって想定される主な問題点は以下のものであった。

① 教師の関与の度合い

学生の主体性をどの程度生かすか、教師はどの程度関与するか。

② 学生のディスカッション力、発表力

半年前まで高校生であった学部1年生に、テーマに関する知識を得るすべを知り、自分の意見をもち、それを人にわかるように表現し、話し合えるだろうか。また、相対的に日本語力の劣る留学生は深い内容のことを話せるだろうか。

③ 留学生の日本語力と日本に関する知識のレベル

留学生の日本語力は中級の上から上級であるが、語彙の乏しさは否定できない。また、日本の文化・習慣や考え方に関する知識も乏しい。

④ 日本人学生の日本と世界に関する知識のレベル

学部1年生が大多数を占めるため、レベルは低いと想定される。

⑤ ディスカッションのテーマと話す項目の選定

単なるおしゃべりや各国の事情を聞くだけにならないような、興味のもてるテーマをいくつか選定する必要がある。互いに非難したり傷つけたりしないもので、シリアスなものと気楽なものを程よく混ぜる必要がある。

⑥ 評価をどう行うか。

上記の問題に関して、この授業では次のように行うこととした。

①に関しては、半教師主導型とする。教師は授業の進行役を務める。また、テーマの設定を行い、ヒントやコメントを適宜与える。討論は小グループに分かれ、各々のグループ内で学生が議長と書記を決め、自由に行う。

②に関しては、テーマに関する自分の見解を他者にわかりやすく話せるようになることを授業の目的の一つとして掲げることにより、学生にそれを意識させるようにする。目標をもてば、何をすればよいかが見えてくるはずだからである。

③④⑤に関しては、毎回次の授業のための読み物（日英対訳、振り仮名つき）やアンケートを宿題として渡して予備知識を与え、自分の見解を明らかにさせておく。

⑥に関しては、討論のテーマに関する小レポートを数回と期末の研究レポートを提出させることとする。

なお、小レポートには、必ずコメントを付けて、学生の名前と顔を確認しながら返却することにより、学生が無名の一学生として扱われているのではなく、教師によって

一人一人が個別的に認識されていることを知らせる。

IV. 「日本事情II」授業の内容

本授業のシラバスを以下に示す。

授業の目標：

留学生と日本人学生が互いに異文化に触れ、日本と世界に対する広く深い理解をもつようになること、テーマに関する自分の見解を他者にわかりやすく話せるようになることを目的とする。

授業の概要：

このクラスは、留学生と日本人学生の40～45名程度の混成クラスである。教師が1回の授業につき1テーマを設定し、予習用の参考資料（日本語・英語対訳）を与える。学生は参考資料を予習し、授業に臨む。

授業では、小グループに分かれて、各々のグループで議長と書記を決め、テーマについて討論する。その後、各議長がクラス全体に対して小グループで行った討論の内容を報告し、全体で話す。各書記は討論の報告書を次回までに提出する。

討論のテーマは、日本人の“Yes”は“No”か、日本人は差別主義者か、宗教による差別、外人、グループ志向、日本人の謝り方、結婚、男女の役割、男らしさ・女らしさ、社会に出て成功するために何が必要か、人を何をもって判断するか、人生の目標、学歴、フリーター、茶髪（若い人のファッション）、デート代は男女どちらがもつか、等であった。

小グループの討論報告書、学生の希望があれば自己紹介文などを「日本事情II」のホームページ（受講生に限定）に掲載し、学生の積極的関与を促す。

評価は、期末の研究レポート（討論したテーマに関連した小テーマを自分で設定したもの）、討論に関する感想文（学期中に2回程度）、授業への積極的参加度によって行う。研究レポートの書き方については講義を行う。

V. 「日本事情II」授業の改良点

1997年以来、基本的には上記シラバスの方法と内容で、留学生と日本人学生の多文化交流・討論の授業として行ってきたが、毎年、学生からの授業評価や感想と、筆者自身の内省をもとに改良を加えた。

主な変更点は、①討論の方法、②留学生の数、③「私の国」発表、④レポートの種

類，⑤レポートの電子化，⑥ホームページ，⑦参考資料である。以下に詳しく記す。

① 討論の方法

97, 98年は，学期前半をディスカッション，後半をディベートとしたが，99年以降，ディベートを行わないことにした。

日本人学生からは，ディベートを行ったことにより，資料を調べる癖がついたこと，客観的に述べる力がつきたことなど，良い評価が多かった。一方，ディベートが日本語力の点で留学生にとって負担となったため，後半の留学生参加者が減った。そのため，留学生との交流が思ったほどできなかったという日本人学生の感想が多かったことを考慮した。

② 留学生の数

99年以降，留学生の数を増やすために，留学生センター所属の短期留学生の参加を促した。これにより，留学生との交流ができなかったという日本人学生のコメントはなくなった。そのかわり，欧米系の留学生がもっといればよいという，贅沢ともいえるコメントが出てきた。

③ 「私の国」発表

99年以降，1学期に数回，ゲスト留学生による「私の国」発表を組み込み，更に多くの国の事情に触れる機会を設けた。

④ レポートの種類

2000年以降，レポートの種類を，紹介文，感想文，報告文，期末の研究レポートとして区別することを学生に意識させるようにした。これにより，レポートの目的による文体や構成などの違いに注意を払わせることができた。

⑤ レポートの電子化

2002年以降，レポートを e-mail の添付書類として提出させるようにした。

⑥ ホームページ

2002年以降，「日本事情II」のホームページを作り，希望する学生の自己紹介文や報告文，写真や伝達事項を載せて，学生の積極的関与を促すようにした。

⑦ 参考資料

新しい参考資料「読み物」の開拓を行った結果，討論のよいきっかけとなるタイプの宿題「読み物」の種類が次第に増えてきた。しかし，英訳の付いた物の数が少なく，まだ十分とは言えないので，筆者が英訳・日本語訳をつけるなどの工夫をしている。また，授業ごとに当日用のレジュメやアンケートを配付し，討論のヒントとなるようにしている。

どんな読み物がふさわしいか

単に日本の文化・習慣や考え方を説明した「日本事情」用とされる本や、日本人論、日本に住む外国人が面白おかしく日本を批判したエッセーなどは、かなりの数が出版されている。筆者も当初はいろいろ試してみたが、この授業の受講生は、それを読んだだけで議論できるほど成熟していないことがわかった。

そこで、著者の見解がはっきりと打ち出され、しかも日本人の特性が面白く書かれている本⁴から取り出したものを主に使うことにした。そういう資料を「古い」「偏っている」と考える学生もいるが、そこから議論が生まれた。

テーマ別に淡々と統計結果を示した資料⁵も使ったが、データを読みこなし、それを参考にして議論をすることは、学生にはかなり難しいようであったため、教師による解説が必要であった。そこで、統計結果をある程度まとめた本⁶を用いたが、英訳版がないため、自分で作る必要があった。

若い外国人学習者向けの日本語雑誌⁷には、若者が興味をもちそうなテーマ⁸や、深刻で対立を生みそうだが不可避のテーマ⁹があった。

日本語について語ることにより日本的な考え方や行動を浮かび上がらせる本¹⁰は、学期はじめの良い導入になった。

その他の本もいろいろ試してみたが、いずれにしても、教師による程よい導入と解説が必要であった。

VI. 学生からの評価結果と考察

毎年の改善後、2001年度には授業の内容と構成は一応整ったので、期末に学生による評価アンケートを行い¹¹、その結果を検証した。

1. 2001年度アンケート結果とその分析

4 『日本人の秘密』長谷川勝行著, Hira-Tai Books, 1994 (英訳付き)

5 『世界の青年との比較からみた日本の青年』総務庁青少年対策本部, 1999 (別冊英訳本あり)

6 『続統計よもやま話の本』大蔵省印刷局, 1992 (日本語)

7 “Hiragana Times” YAC Planning, 2001-2002 (英訳付き, たまに中国語, 韓国語訳も付く)

8 「デートの支払いはどちらがすべきか, 男性? 女性?」「茶髪」など (英訳付き)

9 「意識のずれを埋めよう: 第二次世界大戦と日本人神風特攻隊の過去, 現在, そして未来」(英訳付き)

10 “Nihongo Notes” Omasu & Nobuko Mizutani, The Japan Times, 1979 (英語のみ)

11 資料2 「日本事情II 2001年度に関するアンケート項目」参照

1) 回答者数，性別，日本人学生と留学生の比率

アンケートへの回答者総数は33名で，その内，男性14名，女性19名であった。日本人学生と留学生の別でみると，日本人20名，留学生13名であった。留学生13名中，学部正規生は5名で，8名が留学生センター所属の短期留学生であった。（表1）

表1 回答者数，性別，日本人学生と留学生の比率

回答者数	男性：女性	日本人学生：留学生
33	14：19	20：13（内，学部正規留学生5）

2) 授業の評価点

評価点を満足度と捉える。平均点が85.7点（標準偏差9.0）であるところを見ると，かなり高い満足度であると思われる。日本人学生と留学生の評価点の平均点には有意の差はなかった（t検定）。最大値の100点と最小値の65点は日本人学生のものである。（表2）

表2 授業の評価点（100点満点）

全体 平均点±標準偏差	日本人 平均点±標準偏差	留学生 平均点±標準偏差	全体 最大値	全体 最小値
85.7 ± 9.0	84.0 ± 8.7	87.9 ± 9.2	100	65

3) 授業をとることによって達成したかったこと（記述式回答）

異文化に対する知識を得ることや理解を深めること（14人）が，一番多い達成目標であった。次いで，留学生・日本人学生と親しくなること（9人）と討論できるようになること（8人）が，同程度である。留学生が日本語の勉強のために授業に参加すること（3人）は当然のことであるが，物事を見る目を養うこと（2人）をあげた日本人学生がいたことは，この授業の本来の意義を理解したためだと思われる。（表3）

表3 授業をとることによって達成したかったこと（記述式回答）

回答の 種類	異文化理解		友達・交流		討論 (意見を言う)		日本語の 勉強		物事を見る目を養う / 自国を知る	
	日	留	日	留	日	留	日	留	日	留
日・留の別	5	9	7	2	7	1	0	3	2	0
計	14		9		8		3		2	

日=日本人学生 留=留学生

4) 授業の印象 (複数選択式)

ランダムに並んだ言葉の中から、授業の印象を選んで○をつけてもらった。(複数回答)

肯定的な印象が多いのが目立つ¹² (表4)。1位の「楽しい」(23人)、3位の「面白い」(20人)を合わせると43人となり、授業は単に楽しむためだったのかと思われもする。しかし、「勉強になる」(22人)、「視野が広がった」(19人)、「考えるきっかけになった」(19人)といった真面目な向上志向の印象を合計すると60人となり、むしろ多くなる。この傾向は、筆者が授業中に学生たちの雰囲気から感じ取ったものと一致する。

批判的傾向の印象を選択した者は少ない(表5)。また、否定的な印象を選択した者はゼロである(表6)。

資料3に、それぞれの印象項目を選択した人数を示した。

表4 授業の印象：多かった項目

楽しい	勉強になる	面白い	視野が広がった	考えるきっかけになった
23	22	20	19	19

表5 授業の印象：少なかった項目

指示が多すぎる	テーマが難しすぎる	頑張らなくてもいい	義務感で来る
1	2	2	2

表6 授業の印象：誰も選ばなかった項目

嫌い	つまらない	くだらない	テーマがやさしすぎる
----	-------	-------	------------

5) コメント

授業の改善のための自由に書くコメント欄への記入は11名と少なかったが、留学生は、良い授業であった、感謝するといった肯定的コメントのみであり、日本人は、討論の資料やテーマ、時間の長さについての不満が数人からあった。自国についての認識が深まったという肯定的コメントもあった¹³。

12 授業に対する印象の選択肢には、肯定的なものと否定的なものをペアにして与え、肯定的なものだけに偏らないように配慮した。おもしろい-つまらない、勉強になる-勉強にはならない、等である。

13 資料4に学生のコメントをそのまま掲載した。

このアンケートのほかにも、期末レポートの最後に、どんな意見でも決して成績には影響させないこと、教師は怒ったりひいきしたりしないことを約束して、授業に対する感想を書いてもらった。

有意義で印象深い授業であったこと、視野が広がったこと、友達ができたこと、討論で自分の考えを言う練習ができたこと、レポートの書き方の講義や具体的な指示が大変ありがたかったこと、レポートや発表の良い練習になったこと、楽しみな授業だったことなど、ほとんどが肯定的なコメントであった。また、こういう授業を学生のためにぜひ続けてほしいというコメントもかなりの数に上った。否定的なコメントは、資料とした読み物に書かれている著者の見解が偏っているというものであった。

6) 評価点 (= 「満足度」) と他の項目との関係

本授業全体を100点満点で評価してもらった。評価点は授業への満足度を表す。その「満足度」に影響を与える項目(変数)は何であろうか。それを知ることは授業の改善にとって重要なことである。

以下に、評価点(「満足度」とよぶ)と他の項目との関わりを検証し、満足度に影響する重要な変数を検出した。

・「満足度」と質問3,4,5の関係

質問3: この授業で達成したかったことを達成したか

質問4: 小レポートの回数は適当だったか

質問5: 留学生との交流活動に参加したいか

「満足度」と質問3,4,5の項目との関係を調べたが(t検定)、有意な関係は見られなかった。つまり、質問3,4,5への回答が「はい」であっても「いいえ」であっても、「満足度」を表す点数との強い関係はないということがわかった。目的を達成できてもできなくても、小レポート提出回数に満足でも不満足でも、異文化交流活動に参加したくてもしたくなくても、評価点にはあまり影響しなかったということである。

・「満足度」と質問7,8,9,10,11,12,13,14,15の関係

質問7~15には、6段階評価¹⁴で答えてもらった。

質問7: 12回の授業のトピックのバランス 「バランス」¹⁵

質問8: 内容は、大学の授業として十分レベルの高いものだったか 「レベル」

14 6段階評価 6: 大変良い、5: かなり良い、4: 少し良い、3: 少し悪い、2: かなり悪い、1: 大変悪い

15 本文や表に用いる略語を「」で示した。

質問9：全般的に言って、内容は面白かったか「内容」

質問10：教師の準備は十分だったか「教師の準備」

質問11：教師の説明等はわかりやすかったか「説明」

質問12：教師の態度は良かったか「教師の態度」

質問13：あなたの態度は良かったか「学生の態度」

質問14：あなたはよく準備したり勉強したり頑張ったりしたか「学生の勉強」

質問15：レポートの書き方の講義は良かったか「レポートの講義」

相関

質問7～15が表す9つの項目を変数として、「満足度」との相関関係を調べた。

表7 「満足度」と9つの項目（変数）との関係

項目 (変数)	内 容	説 明	教 師 態 度	レ ベ ル	レ ポ ー ト 講 義	学 生 勉 強	教 師 準 備	テ ー マ の バ ラ ン ス	学 生 態 度
相関係数	.715	.649	.542	.468	.295	.251	.272	.201	.166

「満足度」の「内容」との相関係数は $R=0.715$ (図1参照)、「説明」との相関係数は $R=0.649$ で、特に高かった。次の「教師の態度」、「レベル」にも相関が見られた。最も低かったのは「学生の態度」であった。

つまり、このアンケート結果では、授業に対する満足度に最も大きな影響を与えるものは、授業の内容であり、次で教師の説明のわかりやすさである。一方、学生自身の授業に関わる態度は最も低い値であり、授業への満足度との関係は薄い。

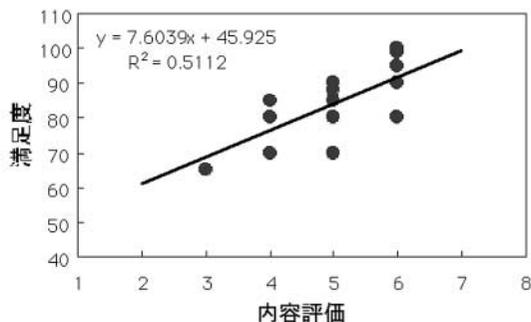


図1 満足度と授業の内容評価の相関

重回帰分析

次に、同じ9つの変数を重回帰分析のステップワイズ法を使って分析した。

表8 重回帰分析の結果

投入順位	変数	重相関係数	R ²	標準回帰係数
1	「内容」	0.723	0.523	0.545
2	「説明」	0.826	0.681	0.436

先の回帰分析の結果と同じく、二つの変数「内容」（標準回帰係数0.545）と「説明」（標準回帰係数 0.436）が「満足度」に対して特に有意に影響するものとして検出された。この2項目を合わせた重相関係数はR=0.826であり、満足度とのかなり高い相関を示す。つまり、満足度の分散の68.2%は、この二つの変数「内容」と「説明」で説明できる（R²=0.682）。

2. アンケートからの結論

上の結果（Ⅵ.の1.の1）～6）からわかることは、学生は教師の提供する授業の内容や教師の態度をよく観察しており、自分の勉強量や授業に関わる態度とは関係なく授業を評価しているということである。そして、この授業は、面白く楽しいものであり、同時に、勉強になり、視野が広がったことなどから、86点という平均点がつけられたことがわかる。

ただし、教師の授業に関する努力が高く評価され、学生自身の努力が低く評価されていたことが気になる。このことだけを見ると、学生の授業に対する受身的な態度が浮き彫りにされるからである。しかし、このアンケートは、あくまで意識調査であり、現実がどうであったかは不明であることを考えると、無記名アンケートとはいえ、多くの学生が、教師に対しては甘い点を、自分自身に対しては厳しい点をつけた可能性もあるのではないか。あるいは、学生は単に自分の努力があまり要求されない授業が好きなのかもしれない。

筆者は、多くの学生が自分を厳しく評価したと思いたい。それは反省につながり、今後の勉学に対する取り組みに良い影響を与えるからである。それこそ、アンケートを学期末に行う意義があるというものである。

VII. 課題と展望

- ① アンケートから得た結果からみると、学生は自分側の勉強量や目標の達成とは関係なく、教師側の努力（内容の面白さ、説明、態度など）があれば満足するようである。VIの2．結論に記したような筆者の思い--- 学生が授業を通して自分自身の勉学への取り組み方を反省したという思い込み--- が誤りであるならば、学生は依然として受身的であり続けるかもしれない。学生の主体性を引き出すことも目標の一つにしたつもりであったが、それは成功したとは言えない。対策を考えなければならない。
- ② 討論のきっかけを作る宿題用資料の選定をスムーズに行う方策を考える必要がある。
- ③ 討論用の読み物の対訳版の数が不足しているため、筆者自身で作っているが、十分ではない。討論用資料の対訳データベースを、他の「日本事情」担当者と協力して作成する必要があるだろう。
- ④ これまでのように読み物を教師が選定して与えるのではなく、学期の後半に討論のテーマや資料の選定などを学生に任せるような形をとることにより、学生の主体性を育て、より良い討論できるようにならないかと考えている。
- ⑤ 学生達は、各国の事情を互いに披瀝して面白がる場所に留まっている。この授業の範囲と学生たちの年齢と経験を考えれば、それで十分なのかもしれないが、うまく指導すれば、もっと深く議論できるかもしれない。その方法を考えたい。
- ⑥ 現在は、この授業を出すのは後期だけである。せっかく学生たちが授業の方法にも慣れ、友達もでき、討論も弾んできたところで学期が終わってしまう。通年の授業を望む声も多いが、教師の負担が非常に大きくなるので、他の教師と連携して通年の授業を組む可能性を検討したい。

最後に、金沢大学キャンパスの国際化が必須のことである以上、日本人学生と留学生の共学授業が、「日本事情II」だけに限らず、様々なレベルで展開されるようになることを期待したい。

【謝辞】

アンケート結果の分析に際し、留学生センターの岡澤孝雄教授に大変お世話になった。ここに感謝の意を表したい。

【参考文献】

- 奥田久子（1988）「学生中心の『日本事情』- 基本的な着眼点の授業研究」『日本語教育』65号
- 奥村訓代（2000）『異文化共有論』, 凡人社
- 川上郁雄（2001）「言語と文化の教育そして日本事情」『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 倉知曉美（1990）「学習者の異文化理解についての一考察-日本語・日本事情教育の場合-」『日本語教育』71号
- 佐々木倫子（1988）「大学正規科目としての日本事情教育」『日本語教育』第65号
- 佐藤勢紀子（1998）「『日本事情』を開く--- 授業改善のプロセス-」『留学生教育』第3号, 広島大学
- 砂川裕一（1998）「『日本事情論』の視界の充実のために」『留学生教育』第3号, 広島大学
- 土屋千尋（1995）「留学生・日本人学生混交クラスでまなぶ異文化コミュニケーション- 『人生相談記事』を活用して-」『日本語の教育と研究』, 専門教育出版
- 徳井厚子（1997）「異文化理解教育としての日本事情の可能性-多文化クラスにおける『ディベカッション（相互交流型討論）の試み-」『日本語教育』92号
- ネウストブニー（2000）『今日と明日の日本語教育』, アルク新書
- バリハワダナ・ルチラ（2001）「日本語・日本文化研修コース 新たな試みと今後の課題」『金沢大学留学生センター紀要』第4号, 金沢大学
- 細川英雄（1994）『実践「日本事情」入門』大修館書店
- 細川英雄（1995）「教育方法論としての『日本事情』-その位置づけと可能性-」『日本語教育』87号
- 細川英雄（1999）『日本語教育と日本事情--- 異文化を超える』, 明石書店
- 三浦香苗・深澤のぞみ・岡沢孝雄（1999）「留学生と日本人ボランティア・チューターの能動的共同活動『日本・世界事情』」, 日本語教育方法研究会予稿集
- 三浦香苗・山口実千代（2000）「初級集中コースのドラマプロジェクトは有効か-漫画読解, 日本事情を経て, ドラマを含んだ研究発表に至る」『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 三浦香苗（印刷中）「教養の課目としての日本事情授業例」『中・上級日本事情テキストバンク』, 東京外国語大学
- 脇田里子（1998）「日本人学生と留学生の共同作業による異文化コミュニケーション」平成9年度科研基盤研究C『多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究』研究成果中間報告書
- 脇田里子（2000）「共同作業による多文化理解教育の実践と課題」『メディア教育研究』第4号, メディア教育開発センター
- 東海大学留学生センター口頭発表教材研究会（1995）『日本語口頭発表と討論の技術』, 東海大学出版会

【資料1】2001年度授業記録

日本事情II 2001.10-2002.2 三浦香苗

回	月日	討論のテーマ	読み物・資料	レポート	備考
1	10.01	オリエンテーション			
2	10.15	自己紹介・謝る時の言葉	g「こわしました」	小レポ1	
3	10.22	差別	a「日本人は人種差別主義者？」	小レポ2	
4	10.29	日本人のあいまいさ	a「日本人の Yes は No ?」		
5	11.12	男らしさ・女らしさ	同		
6	11.19	ブランド志向	a「日本人はどのように人を判断するのか？」	小レポ3 (テーマ4-6より自由選択)	

回	月日	討論のテーマ	読み物・資料	レポート	備考
7	11.26	若者の価値観1 成功	b & c「社会に出て成功するためには何か必要か」		
8	12.03	若者の価値観2 学歴	b「学歴に対する評価」		
9	12.10	会社人間日本人	a「日本人はなぜ長期休暇をとらないのか？」		
10	12.17	若い人と結婚	d「見合い結婚」 e「なぜ日本人は自分のことを馬鹿にしたような言い方をするの？」 e「なぜ日本人は奥さんのことを誉めないの？」		ゲスト留学生参加
11	1.21	講義：レポート書き方	f「論文のモデル：明治近代化の基礎」	期末レポ	発表「私の国ヴェネズエラ」
	1.28	合言葉は「ファッショナブル」？	a「日本女性は世界のお嬢様！？」		発表「私の国カナダ」

出典：

- a 長谷川勝行『日本人の秘密 Secrets of the Japanese』, Hira-Tai Books, 1994
- b 総務庁青少年対策本部編『(世界の青年との比較からみた) 日本の青年 一第6回世界青年意識調査報告書一』, 大蔵省印刷局, 1999
- c 三浦香苗ほか『私を話そう-読解から作文へ』金沢大学留学生センター, 1999
- d 佐々木瑞枝『日本事情』, 北星堂, 1987
- e 賀川洋『誤解される日本人 The Inscrutable Japanese』, 講談社インターナショナル, 1997
- f 浜田麻里ほか『論文ワークブック』, くろしお出版, 1997
- g “Nihongo Notes” Omasu & Nobuko Mizutani, The Japan Times, 1979

【資料2】日本事情II (2001年度) に関するアンケート

(これは成績とは関係ありませんので、自由になんでも書いてください。低い評価でも怒ったりしませんから。)

- ・あなたはどちらですか。○をつけてください。:留学生/日本人学生, 学部留学生/短期留学生, 男/女
- 1) この授業全体を評価するとすれば, 100点満点の何点ですか。→ (/100)
- 2) あなたは, この授業を通して何を達成したかったですか。
- 3) それを達成しましたか。→ はい, いいえ, わからない
- 4) 小レポートの回数は適当でしたか。→はい, 適当 いいえ, 多すぎた いいえ, 少なすぎた
- 5) 留学生・日本人の共同活動に参加したいですか。→ はい, いいえ, わからない (votak, りゅうとも, kiss 等)
- 6) この授業の印象を選んで○をつけてください。いくつでもいいです。

好き, 嫌い, おもしろい, つまらない, 楽しい, くだらない, テーマがむずかしい, テーマがやさしすぎる, 気楽だ, がんばらなくてもいい, がんばらなければならない,

来るのが楽しみだ, 義務感で来る, がんばるのが楽しい

勉強になる, 勉強にならない いろいろ考えるきっかけになった, 視野が広がった, 外国人(日本人)と気楽に話せるようになった, 友達ができた, 新しい発見があった

教師の指示が多すぎる，もっと指示してもらいたい，ほどよい指導だ，宿題が多すぎる，レポートを書くとき構成や文章に気を付けるようになった

----次からは、6段階で評価し、意見があれば書いてください。----

6：たいへん良い 5：かなり良い 4：少し良い 3：少し悪い 2：かなり悪い 1：たいへん悪い

7) 12回の授業のトピックのバランス

8) 内容は、大学の授業として十分レベルの高いものでしたか。

9) 全般的に言って、内容は面白かったですか。

10) 教師の準備は、十分でしたか。

11) 教師の説明等は、わかりやすかったですか。

12) 教師の態度は、良かったですか。

13) あなたの態度は、良かったですか。

14) あなたはよく準備したり勉強したり頑張ったりしましたか。

15) レポートの書き方の講義は良かったですか。

16) 留学生による「私の国」発表（ヴェネズエラ）は、良かったですか。

17) 留学生による「私の国」発表（カナダ）は、良かったですか。

18) 次の表に書き込んでください。

- ① あなたが出席した日に○をつけて、② 討論がよく進んだか、③ 読み物が良かったかについて、6～1の数字を 表に書き込んでください。

6：たいへん良い 5：かなり良い 4：少し良い 3：少し悪い 2：かなり悪い 1：たいへん悪い

--ここに、資料1の授業記録とほぼ同様の表を付けた（表は省略）-

19) 自由に意見を書いてください。

【資料3】授業の印象：チェック数（多い方から）

楽しい23, 勉強になる22, 面白い20, 考えるきっかけになった19, 視野が広がった19, 好き17, 友達ができ
た16, 新しい発見があった13, 来るのが楽しみだ13, 気楽だ12, レポートを書くとき、構成や文章に気を付
けるようになった12, 気楽に話せる11, 頑張るのが楽しい9, 程よい指導である7, 頑張らなければなら
ない6, もっと指示してほしい4, 宿題が多すぎる4, 義務感で来る2, 頑張らなくてもいい2, テーマが難
しすぎる2, 指示が多すぎる1, 嫌い0, つまらない0, くだらない0, テーマがやさしすぎる0

【資料4】アンケート問19に書かれた学生の自由コメント

(留)は留学生, (日)は日本人学生, []内は、筆者註。

-1 この授業は本当に日本の文化の理解に助かりました (留)

-2 本当に面白い授業でした。日本人について様々なことを知るようになって嬉しいです (留)

-3 とてもいい勉強になりました。そして人脈を広げることができる授業だと思います (留)

-4 まことにありがとうございます (留)

-5 討論の資料についてやや古い(自分たちの感受と少しちがう)と感じた (日)

-6 話し合いの時間が短い (日)

-7 読み物に少し偏りがある場合があると思った (日)

-8 身近な問題も良いけど、もう少し深い内容も話したかったなと (日)

-9 今までよりは知ることができたと思う (日)

-10 [80点という低い点にしたのは、グループ分けのくじ引きで] 同じ人ばかり [と同じグループになっ

た) だったから (日)

-11 外国のこともわかったが³, それ以上に日本人について客観的に見れた。その特徴にはさからおうとは思わないが³, 心の定規の一つとしてとどめておきたい (日)

Classroom Study of a Liberal Arts Class called "What's Going on in Japan: Discussions in Cultural Exchange"

Kanae Miura

Abstract

"What's going on in Japan - II " is a liberal arts class offered by Kanazawa University. This joint class is composed of about 15 exchange students (both short-term exchange participants as well as students seeking to matriculate to one of the university's colleges) and 25 Japanese students from within the university (mostly freshmen) who are broken down into small groups for discussion.

This paper reports the problems encountered and improvements implemented in the class between 1997 and 2002, and analyzes student responses to feedback questionnaires handed out at the end of 2001.

Responses analyzed using t-test, correlation coefficient, and multiple regression analysis methods gave the following results: on a 100 point scale, course content and quality/clarity of instruction accounted for 86 per cent of the "completely satisfied" rating.

The amount students studied and their own attitude towards the class had no relationship with the degree of satisfaction. In addition, we saw no connection between the degree of satisfaction and factors such as whether the student was able to realize their personal goals, the amount of homework, or whether or not (for the Japanese students) they manifested an interest in participating in activities with the exchange students. While a large number of students chose responses like "Fun" and "Interesting" to describe their impression of the class, an even

greater number displayed a seriousness of purpose by belonging to a collective group of responses that included responses like "An Effective Way to Study", "Broadened my Perspectives", and "Opportunities to Think".

Therefore, we can say that while quite a few students are earnest in their studies, fun is what fills the seats; and the basis of the relatively high degree of satisfaction was a reflection not so much of hours studied or good attitude, but rather the inherent appeal of the contents and clarity of instruction.

Key words:What's going on in Japan, Cross cultural, Discussion, Joint class for exchange students and Japanese students